
夢追兎。

葵介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢追兎。

【Nコード】

N0660D

【作者名】

葵介

【あらすじ】

最愛の彼女を失くした“僕”冷たく冷え切った心。行き先を見失った自分の方位磁石。生きる理由を失くした“僕”の目の前に突如不思議な男が現れる。『少年の前世は兎だね』切なくも、温かい短編小説。

雨粒を含んだ灰色の雲が、ゆっくりと墓地の上を横切った。

先日立てられたばかりの真新しい十字架の前に、僕は立ちすくむ。
この土の下の棺の中に、僕の最愛の彼女　凜は眠っているのだ。

彼女はもういない。この世に、僕の隣に。

あの笑顔も、優しさも、小さな掌も残されてはいない。

寂しいだとか、人肌が恋しいだとか、そんなレベルじゃない。

心の底が冷たい。凜を失ってிரை、自分の方位磁石が狂ってしまった。

生きる理由を失くしてしまった。

どんよりとした空を仰いでは、ため息をつく。

はちきれんばかりの悲しみも、苦しみも、なぜだか涙になって溢れてはこなかった。

そう言えば昔、ため息をついたら幸せが逃げるよ、って彼女にたしなめられたっけ。

目をつぶれば　。ほら　。

こんなにも鮮明に凜が蘇る　。

カメラよりも鮮やかに、動画よりもなめらかに　。

『唯斗の手っていつも冷たいよねー』

『そう?』

冷たいと言いつつも、ぎゅっと僕の手を握りしめていてくれる凜。
真冬の夕暮れ、空が薄紫色からやがては漆黒の黒へと変わる頃。
僕達は学校帰りにいつも立ち寄る小川のほとりで、談笑にふけていた。

『凜の手はいつも温かいよね』

『唯斗の手が冷たすぎるのよ』

僕の手は何倍も細い君の手。
ぐっと力を入れればすぐに折れてしまいそう。
こんなにもか弱そうな手だけれど、カイロのように温かい。
冷え込むからか、ただ愛おしいからなのか、気がつけばその小さな
掌をぎゅっと握りしめていた。

『僕の手が冷たいのは、心が温かいからだって』

『なによ、それ』

じゃあ私の心は冷たいっていうの、と途端にふくれつつらをする凜。
僕は口角をニイを上げて笑ってみせた。

『だって冷たいじゃん』

『酷い！ そんなこと言う唯斗のほう……』

『だからさ』

僕が凜の心ずっと温めてあげる

『…………え？』

『その変わり、僕の冷たい手は凜がずっと温めてよね』

そこで言葉を切って、再びニイと勝ち誇ったように笑ってみせた。
得意げな表情の反面、声が上ずらないでよかったと、ほっと胸をな
でおろす僕。

彼女は目を見開き、そしてうるうる瞳を潤ませた。

『それって……プロポーズじゃん』

『かもね』

僕の手が冷たいのは彼女に温めてもらうため。

運命なんて信じるタチじゃないけれど

君に出逢えたこと

これはまぎれもない運命だった

なのに

なのに。

思考は引き戻され、無機質な十字架が所狭しと立ち並ぶ墓地在再び目に入ってきた。

どれくらいの間、立ち尽くしただろう？

足がじんじんと痺れてきても、僕はここから離れようとはしなかった。

飽きることなく十字架を見つめる。

彼女が生き返ってくれると心のどこかで信じている僕がいて。

ふがいなくて。

悲しくて。

泣き叫びたいのに、涙が出てこない。

「本当に悲しいときって、涙が出ないんだね」

誰に言うわけでもなくポツリと呟く。

やがて雨粒を支えきれなくなった雲から、ぽつりぽつりと雨が落ちてきた。

冷たい雫が僕の体温と、心を奪っていく。

洋服に雨が染みこんで、そのまま僕の体内に入っていくって、何もかもを感じなくさせてくれたらどんなにいいか。

もう帰ろう、と墓地から背を向けようとした瞬間

後ろで軽やかな声が響いた

「少年の前世はきつと兎だね」

後ろを振り向くと、そこには妙な格好をした長身の男が立っていた。青白い肌に、銀色の髪、にたりと笑った口からのぞく鋭い八重歯。

真っ黒なマントを羽織り、道化師のような先のとがった長靴。

今にも踊りだしそうな晴れやかな顔に妙にいらついた僕は、何の用ですか

とぶっきらぼうに答えた。

「そんなに怒らないでよ。ただ、君の前世が兎だって気づいただけさ」

「……………兎？」

兎だといわれても、ピンとこない。

戸惑う僕を見て、男は案の定かすかな笑みを浮かべた。

「愛する人を失った途端、寂しくて寂しくて死んでしまう哀れな兎さ」

まさに今の僕だ。

愛する人を失くした途端、生きる意味をなくして。

自分の足が動かなくなつて。

何もかもがモノクロに見える。

そのくらい

凜と過ごした時間は

色濃く僕の心の中に存在しているんだ。

「そうですね。僕は……………彼女がいないと生きていけない」

何を言われても動じない。

男の言葉を聞いたところで、凜が生き返るわけではないから。

今は誰とも話したくないといわんばかりに、きびすを返して立ち去

ろうとした。

僕の背中に呼びかけるように、でも、と男が続ける。

「兎は愛する人のことは一生忘れない。

愛する人の想いと共に、夢に向かって野を駆けることができるんだ」

君はなれるかい？

夢追兎に　　？

その言葉と共に、男はくるりと背を向け鼻歌を歌いながら陽気に消えていった。

「夢追兎……つか」

墓地に再び身体を向け、そっと立てられた墓に手をそえる。

彼女の名が刻まれたところを、繰り返し感じ取るようになっていく。

彼女は死んだ。戻ってはこない。

寂しい。苦しい。

けれども二人の想いは、夢は、変わりはない。

『私の夢、なんだか知りたい？』

『うん』

僕のプロポーズの後、彼女はきらきらと目を輝かせてこう言った。

唯斗の隣にずっと一緒にいること

「凜……っ」

“兎は愛する人のことを決して忘れない”

“愛する人の思いと共に、夢に向かって野を走ることができるんだ”

男の言葉が、一つ一つ心へと染み込んでいく。
冷たく冷え切った心に、温かい雫が落ちてきたような感覚に陥った。
涙を忘れていた目から、一滴の雫がぽとりと雨に混じって落ちていく。

「忘れ……ないっ」

忘れるもんか。

「君のこと……うっ、忘れやしないよ」

いつまでも

「君は僕の中にいる……っ、からね」

いつまでも

「愛してるっ……」

永遠に、愛してる。

僕は君と共に夢を追う兔なんだ。

（後書き）

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！
まだまだ未熟者ですが、これから頑張っていきたいと思しますので
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0660d/>

夢追兎。

2010年12月2日01時38分発行